

広告

樹木の性質に合わせ、植える場所を打ち合わせする「クマゲラ」メンバー。



▲森づくりコーディネーター、北海道森林保全推進委員でもある「クマゲラ」代表の関さん。



「あつたふるさとの森」の中にある「千年の森」。ここで「クマゲラ」メンバーは森づくりを展開します。



厚田区の「あつたふるさとの森」で進められている「千年の森」づくり。いしかり森林ボランティア「クマゲラ」が中心となって行う植樹活動で、今年4年目を迎えます。

取材したのは11月初旬。この日は12人のメンバーが朝早くから集まり、沿道にブナなどの苗木を植えていました。「冬に向かうこの時期に植えるのは、活着率（根づく率）がいいから」と教えてくれたのは代表の関 勸悦さん。「冬になると土の上に雪がかぶさり、その重みで根が定着します。苗木も冬眠に入ってきているので、葉が邪魔にならず、作業もしやすいんです」。

今年は8日間に渡って1,000本ほど植える予定ですが、辺り一面に生えているクマザサを刈り、穴掘

り機で土を掘り起こし、苗木を植えていく作業は重労働。関さんも「毎回作業が終わるころには汗びしょりです」と笑います。

「千年の森」ではブナのほか、カツラやヒバ、さらにはクルミや栗など20種類以上の木々を植樹する予定。北海道では珍しいスギの木にも挑戦していました。まるで子どもを育てるかのように愛情を込めて森づくりを行う「クマゲラ」の皆さん。「今はまだ植えたばかりですが、4、5年したら山の形が見えてくると思います。森づくりはプロだけでなく、市民にもできるということを知ってもらえたらうれしいです」。

「クマゲラ」では、苗木を育ててくれる“里親”も募集（この活動を「キノシュ木育里親運動」と言います）。ぜひ皆さんも市民の手による森づくりに参加しませんか？

## 愛情いっぱい！ 市民の森づくり

### 年の瀬

11月中頃、被災地の岩手県大槌町と宮城県名取市から復興ボランティアが戻ってきた。現地の状況を伺うと、口は重く、多くを語らない。恐らく復興への目処が立たない現地での不安を肌で感じた一行は、とても深刻に受け止めたからに違いない。◆震災から九カ月余り、張り詰めた緊張感も限界となり、つらい思いの寄り戻し現象や、自分が助かったことへの罪業感など、メンタル面でのトラブルが発症しているという。心は目に見えないだけに、気付いた段階では深刻な事態となっている。ボランティアのひとりには「がれきの無い光景の方が一層不安を増す」と聞いてきた。◆今年も、はや年の瀬を迎えた。庶民が年越しできるかどうかの瀬戸際から、年の瀬と言われるようになった。被災地の年越しも、二進も三進も目処の立たない、まさに年の瀬を迎えることとなったと言える。◆落語の「御慶」の主人公、八五郎の年の瀬は、ラッキーな富くじで解消するお話であるが、国の三次補正まで九カ月を費やしたつげは、被災地を瀬に追い込み、改歳の言祝を迎えるにはほど遠い。（市長）